

二〇二〇年度

一般公募推薦入学試験

【適性検査】

「国語」問題

1. 問題および解答用紙は試験開始の合図があるまで開かないでください。
2. 解答はすべて解答用紙の所定の欄に記入してください。
3. 受験番号および氏名は解答用紙の所定の欄に記入してください。
4. 試験終了後、解答用紙を問題の上にふせて置いてください。
5. 回収するのは解答用紙だけです。問題は持ち帰ってください。
6. 「国語」の問題は1ページから7ページまでです。

1

次の文章を読んで後の設問に答えなさい。

私たちは、自分の身体運動に連動させられる事物を、自分の身体の延長とすることができる。身につけ、動かすことができ、それによって自己の感覚的境界さえも変化させることを「機能的内破」と呼ぶことにしたい。内破とは内側に侵食するという意味で、道具の外側が、延長した新しい身体の境界を形成し、「身体の内部」が含意するものを変えていくことを指している。白杖や自動車などは、身体に身につけて運動して使用することで、身体の内側へと取り込まれる。感覚的境界は、それらの物の外殻へと広がる。機能的内破物は魂の一部を担うのだ。機能的内破物は、自己の身体の一部となることによって身体機能を亢進させる。眼鏡は視力を増してくれるし、自動車は移動を迅速にしてくれる。

(中略)

私たちは、慣れ親しんだ人間的環境のなかでは、自分の思うようにうまく物事を進めることができる。私たちの自己がそうした人間的環境に拮がっていることは、私たちが自分の一部と感じていることから指摘できる。あるいは、それらの環境を、自分の所有物であるかのように感じることもあるだろう。たとえば、「わが町」「わが山」などと言う場合がある。そのときには、その町や山について、文字通り、自分に所有権があると言っているのではなく、自分にとって離れがたい活動場所だと述べているのである。

所有物は不思議な存在である。先の機能的内破の場合には、そこで使用されている人工物は、まさしく自己の一部として感じることであろう。人工内耳などのサイボーグ化した機械は、文字どおり身体化して自己の内部に収まっている。

これに対して、所有物は、私に帰属しているという感じを与えつつ、しかしやはり、私からは独立した存在である。所有感とは、その対象が自分の心のはたらきを成立させるシステムの一部を担い、自分の意図のもとにありながらも、それでも、自分の意図に完全に従属しないような場合に生じる感覚である。所有物とは、自分で処分可能であり、自由に扱える物であると同時に、ひとつの独立した物として私の制御能力に抗い、完全に自分の自由にはならないものことである。

人間にとって身体は両義的な存在である。一方で、身体は自分そのものであるにもかかわらず、他方で、自分の所有物であるかのように感じる。この身体以外に取り換え不可能であるという点で、私とはこの身体以外の何物でもない。しかし他方、「私は身体である」という表現もどこかおかしく感じるであらう。「自分の体」「私の腕」というように、身体に所有格を使った表現をするのが普通である。しかしながら、やはり私の身体は、私のパソコンや自動車のような所有物ではない。

身体はなぜ両義的なのだろうか。それは、身体を使った行為が、私の思考や想起ほどに

は自由にならないからである。思考や決意とは、脱身体化された精神のはたらきだと言いたいのではない。「〜だと思う」とか、「〜しよう」といった思考や決意は、結局のところ、音量をゼロにして語る内語である。私たちは多くの場合に、自由に内語を発生させることも、消滅させることもできる。想起に関しても同様である。しかし、それらのはたらかしも、本当は完全に自分の自由になるのではない。身体内外のさまざまな条件が原因となつて、自分で自分の発話を制御できないこともあるし、発話内容は言語という社会制度に依存している。想起に関しても同様である。思考や想起は、私のなしうる行為の中で、運動性がより強くともなつた他の行為と比較すると、より自由な行為のひとつだということにすぎない。

思考内容や想起内容のように自分や行為によつて生み出されるものに比較して、身体は、自分で発生させたり消滅させたりできない。また身体には内臓の動きのように不
A の運動もある以上、しばしば自分の意に反する存在である。したがつて、身体が所有物のように思われるのは、思考や想起のような自由度がかなり高い行為に比較して、^(a) シシを動かす行為が不 A の割合が大きいからに他ならない。私たちは疲労や病気で思うように体が動かなかつたり、以前はよりすばやく正確にできたことが運動不足や老化などでできなくなつたりしたときに、身体と自分自身とのずれを感じるであろう。こうしたときには、それ以前の身体的行為と現在の行為を比べて、その差異を感じている。あるいは、他者との比較でそれを感じるのかもしれない。だが、繰り返すが、思考や想起がそうした身体的な限界を逃れているわけではない。比較的^(b)に身体の使用が少ないというにすぎない。

使いなれた人工物や住みなれた環境は、「私のもの」としての自己との一体感が強くなる。私たちは、ときに、自分自身と自分の所有物とを明確に区別することに困難を感じる。名声や地位、子ども、自分が作った製品や作品には、自分の身体と同じような親密な情を感じるし、これに対する攻撃には激しく抵抗するだろう。自分の衣服も家も、自分の家族も、自分の祖先も友人も、名声も仕事も、土地も自動車も、ヨットも銀行の通帳も自分の所有物として、私の存在を構成している。名声や地位は物体ではないが、社会制度によつて自分に割り当てられた性質である。私の所有物が大きくなり繁栄すれば、私は得意になり、逆に小さくなり減弱すれば^(b)ラクタンする。私たちの自己同一性^(b)のかなりの部分が、この所有物の同一性によつて成り立っている。⁽³⁾ 私たちの心のはたらきは、じつに多くの部分が、人間的環境と身体^(b)の相互作用によつて成立している。私たちの現在の生活は、そうした人間的環境なしには成り立たないという意味で、それは私たちの存在の一部である。

しかしやはり、人間的環境は、機能的内破物とならない限り、私からは独立の対象であ

り続ける。自己の感覚的な境界は、自動車のタイヤには延長しても、自分の家の外壁には延長しない。道具であっても身体運動と運動しないかぎり、自己の身体の真の延長物とはならない。改變環境や構築物は、私の外部に留まり続ける。

私たちの自己と自己ならざるものを分ける境界は、究極のところ、運動というよりも移動によって顕わになるのである。移動しても、自分に付き添う物が自己の内部である。私たちは、改變環境において、構築物のなかで、さまざまな道具と社会制度をもとにして心のはたらきを成立させている。これらの人間的環境を私たちは自己の一部とみなし、自己の所有物として意図どおりに動かす。しかし、その慣れ親しんだ環境を離れてしまえば、それらの人工物は私の存在から切り離され、無関与な事物へと変じる。そして、私の存在は、再び、身体へと縮減する。むろん、身につけた機能的内破物やポータブルな道具は、相変わらず私の一部であり続けるだろう。

(河野哲也『意識は実在しない 心・知覚・自由』より)

問1 ——線部(a)「シシ」(b)「ラクタン」を漢字に改めなさい。

問2 ——線部(1)「機能的内破」を説明したものと最も適当なものを次の中から選
び、記号で答えなさい。

- ア 身体運動に連動して、自己の常識的な感覚を揺さぶり崩壊させるはたらき
- イ 内部に深く入り込むことで内側の機能をえぐり、外側に押し出すはたらき
- ウ 自分の身体の境界を広げ、本来持っている身体機能をより高めるはたらき
- エ 自己の内側に侵食し身体の一部となるだけでなく、魂も浄化するはたらき

問3 — 線部②「やはり私の身体は、私のパソコンや自動車のような所有物ではない」とありますが、それはどういうことですか。説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 身体も所有物も、どちらも「私」の制御能力に抗っているという性質を有しているが、身体は取り換え不可能だという点において、所有物と異なっている。

イ 身体も所有物も、どちらも自分の意図に完全に従属していないという性質を有しているが、身体は自分で処分可能だという点において、所有物と異なっている。

ウ 身体も所有物も、どちらも自分そのものであるという性質を有しているが、身体は「私」から独立している存在であるという点において、所有物とは異なっている。

エ 身体も所有物も、どちらも所有格を使った表現が可能であるという性質を有しているが、身体は自分に帰属している感じを与えない存在だという点において、所有物と異なっている。

問4 空欄 A に入る最も適当な語を次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 用意 イ 随意 ウ 同意 エ 本意

問5 — 線部③「私たちの心のはたらきは、じつに多くの部分が、人間的環境と身体相互作用によって成立している」とありますが、「人間的環境」について、次のように説明しました。空欄に当てはまる表現を、本文中から抜き出しなさい。

私たちは、自分の所有物をあたかも自分自身だと錯覚する。自分の持ち物（衣服や土地や家族や名声など）によって

I（五字）を獲得し、そこからプライドやコンプレックスを生じさせる。ここで大事なのは、所有物とは自分の身体運動に

II（二字）している事物などのように、自分に付き添って離れないものであるということだ。慣れ親しんだ環境、離れがたい場所や物、それらは完全に自分の意図どおりになるわけではないものの、私たちはそれらを自己の一部とみなすことができる。そのような、身体の

III（三字）

となるものを人間的環境と呼ぶのである。

問6 本文の内容と合致するものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 私たちが慣れ親しんだ環境を「わが町」「わが山」という表現を用いるのは、他人に自分の縄張りを主張したいがゆえである。

イ 思考や決意といったものは内語といい、表に出すのを敢えて抑えている感情のことである。

ウ 自分の発話内容は、言語を使用している以上、その国の社会制度に則っているように考慮しなければならない。

エ 名声や地位といった物体でないものの方が、衣服や自動車といった物体よりも自己同一性を形成しやすくする。

オ 機能的内破物は移動の影響を受けないので、私の存在を構成する要素であり続ける。

2

次の文章を読んで後の設問に答えなさい。

文化七年霜月⁽¹⁾、田安御馬方をつとむる高木久八といふ者、霜月のはじめ病みて死す。死して夢の心地に広き河原に出て、それより草深き野道に出でしが、岐路あり。左へ行かんや右へ行かんやと思ふうち、本郷二丁目八百屋佐兵衛の子藤五郎といふ者来たれり。A「いかか」といふに、彼はB「左へ行かん」といふ、C「我はとかく右へ行くべし」とて別れ行けば、一つの楼門あり。門の前に黒き衣着たる僧立てり。僧のいふは、D「なんぢ古里に思ひ残せしことなきや」といふに、E「一人の母をもちて候ふが、他国にありて去年も文を遣はせしことありしが、これに暇乞ひせずに来たりしこと心にかかれり」といふ。F「しからば帰りたきや」といふまゝに、G「いかにも帰りたく候ふ」といふ。H「さあらば帰るべし」とて、かの僧この者の背中を押すと覚えしが、夢の覚めたるごとくよみがへりぬ。然るにても本郷の八百屋のこと心もとなく、人を遣はして聞かせしに、I「その日に身まかりし」といふもあやし。J「これ浮きたることにあらず、まのあたり人の聞きしことなり」とて、亀屋文宝の語りしまゝに記しぬ。

(『二話一言』より)

※1 暇乞ひ……別れを告げること

※2 身まかりし……亡くなった

※3 浮きたること……根拠がないこと

※4 亀屋文宝……江戸時代後期の狂歌師、大田蜀山人の弟子

問1 ——線部(1)「霜月」とありますが、旧暦の何月のことですか。算用数字で答えなさい。

問2 A～Jの会話文の中から高木久八の発言をすべて選び、記号で答えなさい。

問3 ———線部②「人を遣はして」とありますが、だれが何のために人を遣わしたので
すか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 亀屋文宝が筆者の疑いを解くため
- イ 佐兵衛が息子藤五郎の行方を捜すため
- ウ 高木久八が藤五郎の消息を確認するため
- エ 藤五郎が高木久八のその後を確かめるため
- オ 黒き衣着たる僧が高木久八の背中を押すため

問4 本文の内容と合致しないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 田安家の馬方を務めていた高木久八は、一度死んだがその後生き返った。
- イ 高木久八は死んだ後、広い河原を抜け、草深い野道を行くと分かれ道にたどり着いた。
- ウ 楼門の前にいた僧は黒い衣を身に着け、高木久八に故郷に思い残したことはないかと尋ねた。
- エ 高木久八は母を他国に残して江戸で生活していたが、去年は手紙も出さず疎遠になっっていた。
- オ 死後、右の道に進んだ高木久八は生き返ったが、左の道に進んだ藤五郎は生き返らなかった。

(以下余白)

